

桜井英治・清水克行著

『戦国法の読み方』

——伊達植宗と塵芥集の世界——

(高志書院選書 10)

高志書院 二〇一四・五刊
四六三〇〇頁 二五〇〇円

歴史研究の醍醐味の一つは、史料の謎解きにあるだろう。なかでも「塵芥集」は、解釈できそうでできない条文が多く、謎の宝庫ともいえる。本書はそのようなテキストをもとに、論文などは語られない「史料読み」の楽しさと難しさを、福島温泉宿と居酒屋での対談という形式で「(笑)」を交えつつ披露し、読者に追体験しながら感じてもらうものである。本書の構成は次の通りである。序 戦国法の魅力／I 犯罪者をつかまえる／II 売買のトラブルはゆるさない／III 立法の情報ソースをさぐる—原「塵芥集」をもとめて／IV 戦国大名の夢のあと—伊達植宗と桑折西山城。

Iでは、検断沙汰を取り上げる。まず、「アジュールへの「挑戦」」をテーマに、盗人が山中で「狩人とならずらへ」て人の財宝を奪うことを禁じた65条等から、独自のルールをもつ山の世界に対する制限を、「家宅搜索」関係の条文から、「家」の治外法権に対する規制を検討する。次に、「自力救済と当事者主義」と題して、窃盗事件等で被害者側が容疑者の捕縛等を行う自力救済社会の諸

問題と伊達氏による自力の規制を考察する。

IIは、土地と下人の売買、質屋でのトラブルについてである。まず、買地安堵状に関する規定に注目し、主従関係・親権・本主権をめぐる争いや安堵状発給の意義を追究する。その上で、本銭返しや年季売り証文の受給者問題や証文紛失時のトラブルを考察する。下人売買については、その実態や下人と名子・被官の違い、下人が「独立への奮闘」を見せる様子に迫る。そして、「塵芥集」と「蔵方之掟」で矛盾する質屋の規定を取り上げ、土倉同業者団体や伊達家側の意向も法に反映されたと指摘する。

IIIでは、「塵芥集」の編纂過程を探る。「御成敗式目」との比較から、戦国的性格や「塵芥集」の特色を見出し、使用文言の違和感や所務沙汰規定の少なさから、式目以外の参考法令の存在を想定する。なお、論点の一つ「時の守護所」は、「所」ならば問題なからう。IVは、落し物の札を掲げさせた「西山の橋もと」や寺院跡、側室や家臣の名をもつ館跡を訪ねながら西山城跡を巡り、植宗の人間像にも思いを馳せる。

以上のように論点は多岐にわたり、謎は謎のままの部分もある。一部の研究者からは、「その先を悩んでいるのに史料解釈だけ書かれて困る」と嘆く声も聞かれた。だが、「史料読み」の楽しさと難しさを伝えたい、という本書の目的は達成されていると思う。特に、これから「塵芥集」の魅力に迫りたいという人にとって良書となる。ただ、その際は「塵芥集」以外の史料も参照にすると考察はより深まる。例えば、科人成敗の様子は政宗期から想定できる所もあり、侍と以下という身分区分の意義も推論できるであ

ろう。なお、対談には高志書院の濱久年氏も参加し、専門用語や事象の説明を促す役割や案内役、「笑」を主に担当しており、本づくりの楽しさも伝わってくる一書である。
(遠藤ゆり子)